

観音物語 (16) カミナリ親父

うんらい くせい でん ごうばくじゅだいう ねん び かののんりき おう じ とくしょうさん
雲雷鼓掣電 降雹澍大雨 念彼観音力 応時得消散

雲雷鼓り掣電し 雹を降らし大雨を澍ぐも 彼の観音の力を念ずれば 時に応じて消え散ることを得ん

稲妻とともにガラガラと響く雷の轟音…、まるで巨大な車輪が雲の上を暴走しているようである。あちらでゴロゴロ、こちらでゴロゴロ…、天地をわがもの顔でかき回して遊んでいる。

天地を引き裂く雷は、晴れのち曇りというおだやかな変化ではない。晴天に黒雲が湧き起り、突然の土砂降りだ。青天の霹靂はグラウンドの試合を突然に中止にさせる。樹木に落ちた雷は幹を焦がしてパツリと裂ける。夜の街全体が一瞬に照らされる。

かつては、地震、雷、火事、親父という四つの怖いものがあつた。我慢できない悪戯^{いたづら}であれば、親父がカミナリを落とす。いっぺんに効き目があり、悪^{わる}が即ストップする。これが神鳴りのご神託である。ところが最近では、威厳のあるカミナリ親父はいなくなってしまった。サザエさんの父・磯野波平さんよ、頑張つてほしい。ところが、波平さんの声優である永井一郎氏が永眠された。引き続いて、茶風鈴氏の声で波平さんのカミナリ親父を聞くことができるのはうれしい。ところが、世の中のカミナリ親父はサザエさんの家庭だけになってしまったのではかなろうか。サザエさんは一家団欒がほのぼと描かれた日本国民のマンガである。

親父のカミナリは怒っているのではない。叱っているのである。タバコを吸っている中学生がわが子であれば、親父は突然に落雷する。このカミナリは怒りではない。厳しく叱って注意しているのだ。ところが、わが子も高校生になれば、反対に殴られたり、絡みつかれたりする面倒を避けて、その場を甘く見過ごしてしまうことが多いようだ。

今の時代、注意をするには勇気がいる。相手に嫌われても叱るという正義感は薄れてしまったのだろうか。かつては町内にカミナリ親父がいた。しかし、これもいなくなってしまった。その子の親に嫌われても、正しいと思ったことは勇気をもって注意をしたい。叱るべき子どもが叱れないというのは情けない。叱るのに勇気がいるというのは、おかしな話である。

親子の話し合いがなかなかまとまらず、理屈をこねる賢い青少年が増えた。どうしても改めさせねばならないときは、親父の一喝があれば屁理屈はストップする。親父にはこのくらいの気骨があつてもいい。

鉄は熱いうちに打てという。親の意見と冷酒は後から効くという。観音力の効験は一発である。改心が決まれば、時間の経過はない。一瞬の落雷によって迷いから覚める。親父のカミナリを受けていない子どもは弱い。カミナリ親父よ、気骨をもって落としてほしい。